

中年期女性の自我同一性に関する研究

——同一性変化のタイプとその特徴の分析を中心に——

堀内和美

I 問題と目的

中年期は、暦年齢的にはおおよそ40～60歳と定義され、肯定的にも否定的にも、ライフサイクルにおける前半から後半への心理的転換期である。本研究は、中年期女性の心理的变化を、Erikson, E. H. (1959)の自我同一性理論の観点から明らかにするものである。自我同一性の変化が中年期に起こりやすいことは、すでに岡本(1985)によって示されている。本研究における自我同一性は、中年期の心理的発達に関する先行研究を論拠とした、「身体感覚、時間的展望、自己確信、有能感、世代性、自己評価・再方向づけ」の6領域によって定義される。

ところで、成人期女性の自我同一性に関する研究からは、ライフスタイルによって自我同一性の強さや内容に相違があることが見出されている(O'Connell, A. N. 1976; 岡本, 1987)。特に、専業主婦と継続就業者との間の相違は大きく、家庭役割に比して職業的な役割や関与が、自我同一性の発達により強く関わる可能性が指摘された。しかし、これらの研究には、有職女性の職業がいずれも一括されているという問題点がある。女性のキャリア発達研究では、職種によって自己概念に相違があることが(Rossi, A. S., 1965他)、また親から娘への職業継承性に関する研究では、特定の専門的職業において継承性が高いことが(小川・田中, 1980)見出されており、職種による自我同一性の相違が考えられるからである。従って、本研究では第1に、中年期女性を一括して扱うのではなく、専業主婦および女性の典型的職業として看護婦と小・中学校教師を対象者として、自我同一性の変化における3群の相違点を考察することを目的とする。また、変化に関わる要因も合わせて検討する。

また、こうした職種による相違点の他に、中年期の心理的变化には個人間の相違があることが示されているが(岡本, 1985)、これまでの研究では、方法論や扱われる自我同一性の側面の違いもあり十分整理し得ない。従って、本研究では第2に、中年期の自我同一性の変化の様相により個人のタイプ分けを試み、各タイプの特徴を分析することを目的とする。

II 方法

半構造的面接法による。面接項目は、①対象者の属性、

②生育歴、③中年期の自我同一性の変化を捉える項目からなる。このうち③に関する項目は、Rasmussen, J. E., (1961, 1964), 岡本(1985), Gould, R. L. (1972)等の質問項目を基にして、既述の6領域に沿って選択・作成された。対象は、40代の専業主婦17名、看護婦23名、教師19名(合計59名)である。面接は個別に約1時間半～2時間実施し、録音された。結果は、③については、項目別に反応内容を整理し、パーセンテージが相対的に高かったものを各群における自我同一性の変化の特徴を示すものとして詳しく内容を検討した。また、変化に関わる要因は、群ごとに同様の内容のものをまとめ、パーセンテージを算出した。さらに各対象者の生育歴を追い、自我同一性の形成と変化の過程を把握する個別的な分析を行なった。

III 結果と考察 I —— 中年期における自我同一性の変化・発達の分析 ——

結果は、次のようにまとめられる。まず、専業主婦群と有職群(看護婦群・教師群)において、大きな相違点が見出された。すなわち、有職群と比べて専業主婦群では、中年期に至り自我同一性の揺らぎを示した対象者が多く見られたことである(専業主婦群65%, 看護婦群17%, 教師群21%)。これらの者は、能力を発揮する場や打ち込める活動を求めて、後の人生の生き方を模索していた。体力の衰えや子供の成長によるゆとりといった中年期特有の要因と、それに伴って起こる時間の有限感や生産的活力の低下などの否定的な心理的变化は、家庭中心に形成され発達してきた専業主婦の自我同一性の動揺そのものであるといえる。このことは、中年期に至り、これまでの家庭内の活動や役割のみでは自我同一性の確認が困難になったことを示すものと考えられる。一方有職群においては、自我同一性の動揺を示した一群の対象者もみられたが、全体としては、否定的な心理的变化を抱えつつも、主に職業経験を通して自我同一性の確立感や安定感を増大させていた。以上の結果は、O'Connellや岡本の研究結果と間接的に一致するものである。

次に、共に女性の典型的職業である看護婦群と教師群にも相違点が見られた。すなわち、看護婦群に比して教師群の多くは、肯定的・否定的な心理的变化を契機として、教師としての成長の自覚や教職への迷い等の形で自

己の再認識を行なっていることである（看護婦群26%、教師群84%）。教師群の多くの対象者にとって40代は、自我同一性の安定化を基盤としたさらなる発達区切りの時期として位置づけられるのに対し、看護婦群では、内的には肯定的・否定的な心理的变化が見られるものの、75%の者が現状のままの継続就業を望んでおり、転換期的な特徴は弱い。こうした違いは、看護婦群の青年期の自我同一性形成の特徴により一部は説明されると考える。すなわち、看護婦群の約50%が、児童期から父親の死や経済的苦労といった自立への外的圧力を経験しており、青年期においても自立と継続就業に強く方向づけられた自我同一性を形成していた。従って中年期の否定的な心理的变化の中にあっても、自我同一性の変化の現れが弱いのではなからうか。

IV 結果と考察II——自我同一性変化のタイプとその特徴の分析——

ここでは、反応内容と各領域の心理的变化の程度を評定した得点とを基にして個人が分類された（図1）。各群により多少の相違は見られるものの、大きくは2つのタイプに分類される。第一のタイプは、中年期に至って自我同一性が安定化しているという特徴を持つ。つまり、中年期の否定的な心理的变化は体験されているが、自己確信や有能感といった肯定的な心理的变化がより大きく意識されている。このタイプの対象者の青年期における自我同一性ステイタスは様々であったが、多くの者が青年期や30代において、主体的かつ積極的に家庭生活や職業生活に関与してきたという意識を有していた。第二の

タイプは、中年期に至って打ち込める活動や今後の生き方を模索したり、生産的活力の低下や限界感などの否定的な心理的变化を顕著に呈し、それまでの自我同一性に動揺が見られるという特徴を持つ。このうち、積極的に今後の生き方を模索している者は、30代に職業生活に積極的に打ち込んだことを回想していたことが特徴的であった。

V 今後の展望

本研究は比較的少数の限定された対象者で行なわれたため、今回見出された各群の相違点がどの程度の一般性を持つのかを、職種や年齢幅を広げて検討する必要がある。また個人のタイプ分けを試みたが、各タイプの青年期から中年期に至る自我同一性の発達過程の相違は十分明らかにできなかった。これは、青年期と中年期の自我同一性を比較し得る枠組み（例えば自我同一性ステイタス）を用いて検討することによって明確化したい。さらに、職種やタイプ間の相違に関わる要因について、本研究では職業や家庭外活動に対する関与のあり方の重要性を示唆するにとどまっており、残された課題となっている。

文献

Erikson, E. H., 1959 Identity and the life cycle. *Psychological Issues, No. 1, Monograph 1*. International Universities Press, New York. (小此木啓吾(訳) 1973 自我同一性 誠信書房)

O'Connell, A. N., 1976 The relationship between life style and identity synthesis and resynthesis in traditional, neotraditional, and nontraditional women. *Journal of Personality*. 44, 675-668.

岡本祐子 1985 中年期の自我同一性に関する研究 *教育心理学研究*, 33, 295-306.

岡本祐子 1987 成人女性の自我同一性に関する研究(1) ——職業・育児への関与と同一性達成の関連性の検討—— *日本教育心理学会第29回総会発表論文集*, 496-497.

他

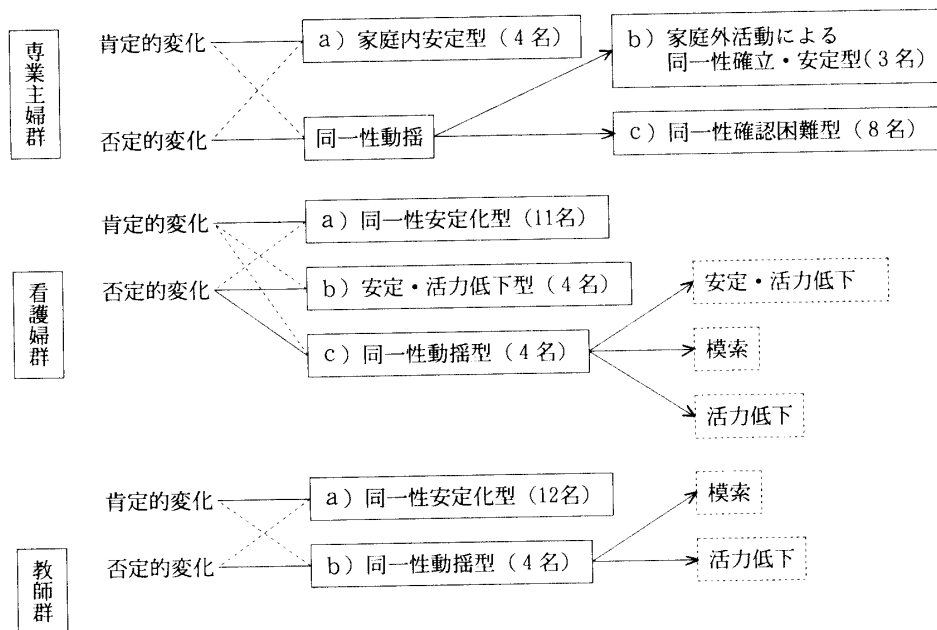


図1 中年期女性の自我同一性変化の横相とタイプ

(注) 図中の——印は、肯定的・否定的な心理的变化との間の強い結びつきを、
印は、弱い結びつきを示す。